

フランスにおける統一学校

名 倉 英 三 郎

中世的な古典主義とデカルト的合理主義と、ナポレオンの中央集権制度とは、度重なる革命の激動にも消え去ることなく、フランスの教育の伝統として二十世紀に生き続けてきた。

十八世紀末の革命政府は国家の民主的統一を図るために、学校を国家の手によって統一組織化し、教育を教会から完全に切離すことを試みたが、ナポレオンが政権を握ると、彼は国民の民主的な団結を阻止するために教育の国家的統制を図った。彼はローマ教会の干渉を好まなかったが、革命勢力を根絶することの必要から、宗教学校の復活を積極的に認めた。また彼は支配階級の育成と官吏の養成のための教育に期待するところが大きかったので、中等教育に関心を払い、リセ (lycée)、コラージュ (collège) を各都市に設置し、高等教育の準備課程とした。このようにカトリック信仰と準備教育とを許容したことから、教育内容が古典主義的なものとなったのは必然であった。ボナパルティスムを背景とする古典的でしかも百科全書的主知主義がフランス中等教育のカリキュラムの伝統となった。

かかる古典的知識の偏重は、教材中心主義の教育観を是認し、教師の口授と生徒の誦讀とをもって唯一の教育方法とした。よい生徒とは繊細な感受性、従順さ、記憶力をもった無型の容器のことであり、日増しに増える知識を誤りなく吸収することに秀でたものである。個性的な、自主的な、批判的な独創的な態度は、学習者にとっては最も好ま

しくないことである。中世の僧院で子どもに強いられた教育方法がそのままに採られていた。この受身的な消極的な態度を一層助成する方法が所謂講義法である。しかもその講義法はつねに学問の伝統に忠実である。それは文化遺産の複写をもって任務とするのである。このような教授法は生徒の興味から全く遠く離れ、現実の生活の否定の上にはじめて可能である。これはただに生徒の自発的な活動を抑制するだけではなく、教師における創造的な思考をも閉塞させた。このような教育にあつては、生徒は教育計画の中心におかれる替りに、外周に押しやられ、教室は教師のアカデミスムの反芻の場となり、授業とは権威主義的観念論の強制に他ならない。身じろぎもしない生徒の鼓膜にひびく教師の難解な言葉と、その言葉を反復する生徒の声とが教室で聞かれるすべてであつた。教えられた事柄を順序正しく誦することによって生徒の進歩は測られた。ヨーロッパ文化の源泉たるフランス文化に対するフランス人の、フランスの教育者の誇りと確信は、ドイツの教育学の理論を受け容れることに偏狭であつたし、また自然主義的な主張に貫かれたルソーの教育論への顧慮もなされることがなかつた。十九世紀のフランスの教育は、近代化されつつある社会生活の中で、ヨーロッパ諸国家の教育の中で、独り典雅を誇つていた。

フランスの中等教育は、教育の階梯を現わすものではなくして、被教育者の社会における身分的階級的な差別に基づいて行われる教育の一系列を指していわれているのである。将来、社会の指導的支配的な地位と職業を約束されている階級の子弟に対して行われる教育を意味しているのである。それ故中等教育は特権的な勢力をもつようになり、外に対して排他的であり、内に対しては生徒を窮屈な袋の中へ押し込める決定的な役割を果すようになった。学問の権威と学校の名声のために、両親の社会的地位と栄誉心のために、生徒の若々しさと弾力性と生得的な能力は摘みとられ萎縮させられた。幸いに教育の機会に恵まれた有産階級の子弟は、高等教育を受けるためにバカロレア (Baccalauréat) の厳重な試験に苦しめられなければならなかつた。

このような社会的な圧力の下に仕組れた教育の仕組は、古典的な伝統を教育の中に存続させる上に決定的な影響を及ぼしている。肉体的労働や実務的職業或はそれらにつながるものは卑しむべきものであり、それらから無関係な思

考的な働きこそ貴いものであるという学問観、職業観が古典教育に対する執着を結果し、また非実用的であるが故に勤労階級は学び得ないところから一層それに対する憧憬を強めるとともに、自己満足に陥ちいつていった。古典の本質的な価値を正しく認識したが故に古典が学ばれたのではなく、社会的な差別をつけるために、階級的な優越を堅持するためにその習得に熱心だったのである。

社会の時代的要求に対して殊更に目をふさごうとする反民主的な社会は、階級性を社会の中に残すとともに、教育の中に似而非なるアカデミズムを容認する。そして教育から機能的な役割を取り除いて、百科全書的な羅列主義に置き換える。その結果として生徒は過度の精神的肉体的緊張をもって学習に対する負担を課せられるのである。

フランスは近代社会実現を目指し、革命によって共和政を樹立した国家の好例として挙げられる国ではあるが、十九世紀まではその間に王政の復古がまた同じ民衆の歓呼の裡に成し遂げられてもいる。このような社会の進歩の制動力は、政治に対する抱負と教育に対する期待との間に懸隔が存していたことに原因するものである。

しかし頑固な古典主義者、伝統主義者の主張も、学習すべき知識の増大と社会国家の要請する近代化のために、カリキュラムの改変を余儀なくされた。だが彼らは多岐に互る学問系列を再組織して統一ある全体とする替りに、伝統的なカリキュラムと並置することによって妥協を計ったにすぎなかった。そのため生徒は教科の内面的な調和は無論のこと、外面的に統一を図ることすら不可能となり、その上にこれまで以上に謠記に苦しめられることになった。

ナポレオン時代に設けられた教師の任命制度と視学官制度とは、自由主義政体であっても王政時代にも強化されこそすれ後退することはなかった。自由主義的な政府の下にあってても下層階級のための実業教育を施す高等小学校を含む初等教育制度と、上流階級のための独占的な中等教育制度とは存続していた。共和主義者は教育制度上の二重性を徹去することを望んだ。系統を一本化することはタレーラン、コンドルセ、ロベスピエール以来の共和主義者の抱いた公教育の理想であった。しかしその実現はつねに有産階級と宗教団体とアカデミズムによって妨げられてきたのである。完全な無階級社会が実現されない限り、教育の単線化を実現することはできないものようである。また信仰

の奥儀や学問研究が限られた人たちの手に握られている間は困難なものようである。第三共和国において義務教育年限の延長とともに、複線型の教育組織を徹廃することが試みられたが、伝統に固執し特権意識を払拭し切れない人たちの反撃に遭い、また小学校教師には世俗人が任命されることになったが、宗教教育復活のためになされた聖職者からの煽動は止むことがなかった。

十八、九世紀のフランスの教育は、上下の階級制と、聖俗の信仰の違いと、左右の政治思想と、新旧の学問観とが対立しながら、フランスに対する深い信頼と誇りと愛国心とによって均衡を保ちながらそのままに二十世紀に引き継がれてゆくのである。

二

第一次世界大戦の戦線の塹壕の中から、フランスの教育の改革の必要が唱導された。大戦は続き、戦死者は夥しく、どうしても新しい国民の指導者を養成しなければならぬということ、また将来の戦争を回避して平和な世界を建設するための教育が望ましいことが戦陣の中で得られる僅かな余暇に論じられたのであった。

父親たちが弾雨の中で共に手を携えてフランスの名誉のために戦っているのに、何故その子どもは一つの腰掛に並んで勉強することが許されないのか。平等を国民の理想としているのなら、少くとも子どもはその理想の下に生活させるべきである。また最もよい未来を作るために国民の教養を昂めなければならぬ。索められるべきフランスの教養は内容は雑多であろうとも、その流は一筋であるべきではなからうか。教師たちは夫々の学校の中に閉じ籠って他と協力することがない。ある者は蔑視し、またある時は羨望し嫉妬する。だが同じ国民の教育に携わる者は相互に無関心であってはならない筈である。戦場にあつては小学校の教師も、リセやコレジュの教師も大学の教授も相結ばれているのに、何故学校に戻ると互に敵意を示すようになるのか。

新しい秩序と新しい理想を産み出すためには新しい教育がなければならぬのではなからうかという惟いが、戦線

に勤務する数人の人たち (J. M. Carré, H. Dontenville, P. Doyen, J. Duval, H. Luc, E. Vermeil, R. Vieux) に抱かれたのである。彼らは彼らの主張が独断に陥ることを避けるために、Compagnons の名によってその見解を表明し、学校制度を統一することをもって義務と考えたのである。

フランスの新しい教育理想がこの様に戦闘の中から生れたといふことは興味あることといわなければならない。

ドイツにおける統一学校 (Einheitsschule) の思想は、一八一九年のシェフェルン (J. W. Süvern 1775-1829) の学校制度改革のための法案を嚆矢として、統一学校思想とその実現のための運動は続けられた。その代表的なものは、ランゲ (F. Lange 1828-1875) の学校改革連盟 (Verein für Schulreform) とその流れを継いだ「ドイツ統一学校連盟」(Deutsche Einheitsschulverein) や、「ドイツ教員連盟」(Deutsche Lehrverein) であり、「統一学校論」としてテウス (J. Teus 1860-1937)、「ライン」(W. Rein 1847-1929)、「ナトルプ」(P. Natorp 1854-1924)、「ケルミンシュタイナー」(G. M. Kerschensteiner 1854-1932)、「シッキンゲル」(J. A. Sickinger 1858-1930) がある。これらの統一学校への傾向は政党の教育政策にも反映して、「社会民主党 (Sozialdemokratie) やバイエルン中央党 (Bayrische Zentrumspartei)」、進歩的国民党 (Fortschrittliche Volkspartei) において夫々所説に差違はあるが採択されている。この理想が現実のものとなったのは大戦後ワイマール憲法においてではあるが、しかしその歩みは一世紀に及ぶものである。

これに対してフランスの統一学校 (l'école unique) は、ここにその第一歩を踏み出そうとしているのである。コムパニヨンの人たちは、リセや私立学校の教授、或は高等師範学校の学生たちであったから、ドイツにおける統一学校論に関して何らかの知識を所有していたのであるが、それでは何故に統一学校の必要をしかも戦線にある時に感じはじめたのか。その理由については今窺い知る材料をもたないが興味あることである。しかも死の様な単調さと死に直面した状況の下で、次の世代の幸福のために疲れた精神を緊張させながら教育の理想を論じ、更にその実現のため同志の獲得を図り、主張の公開を続けていたのである。またコムパニヨンの主張を掲載した新聞 (Opinion) もそ

のために力強い援助を与え、パリ市内にドイツ軍の放つ長距離砲弾の落下する時にも、国民へ呼びかけることを止めようとはしていない。

一九一八年、休戦とともに、コムパニオンはその理想の理論化と実践活動とのための閑暇をもつことができようになる、コムパニヨンの人々は彼らの理念を世論に訴えるために積極的な活動を開始した。

二十世紀の世界的な危機は過去のものとして葬り去らしめ、未来は希望を孕むものとして期待されなければならない。しかし現実には、未来はなお恐怖と戦慄を感じしめ、過去は再び甦ろうとしている。未来を閉ざし過去を復活させる原因を探ることも必要であるが、それにのみ全ての努力を注ぐことは止めるべきである。今混沌のうちにおかれている現実の中から、新しきものを産み出さなければならぬ。「歴史を書くことではなく、歴史を作ること」に向わなければならない。それ故古いものがそのうちにもつ原因によって亡ぶならば、亡ぶにまかせておく他はない。古きものを古きままに留めおくために努力しようとすることは、伝統や偏見に対するロマンティックな執念でしかない。それは現実に対する認識を誤らしめるものである。歴史を批判し、歴史と絶縁し、新しい叡智をもって「新しいフランスを創造し、新しいフランス精神を作ること」が新しい任務である。そのためには「新しい教育、新しい制度、新しい精神力を作ること」が要請される。この課題を成し遂げることが現在の歴史的使命なのである。新しい精神の持主に新しい家を与えようと念願する情熱に燃えるものは、「破壊されてゆく現実を批判的な態度で冷静に見守っている」ことはできない。使命を達成するために古きものと、古きものを継承する「現在」の「破壊が必要である」と断言せざるを得ないではないか。

フランスの教育の伝統は余りにも美しく整っている。国の外から加えられた力にも、内で起った変革にも、優美に積み上げられた文化の骨組みは少しも揺ぐことなく伝承されてきた。リセ、コレジュ、大学入試資格試験であるバカロレア、高等師範学校 (école normale supérieure)、各地方の教育の中核であり監督官庁でもある十七の大学、中学

教員の資格試験 (concours d'agrégé) 等、いづれにおいても多くの高い内容と厳格なコンクールが課せられている。また講義もフランスの文化の伝統にふさわしく、精神的所産の昇華結晶である。しかもそれは生の形式によらず、美しく調整された典雅な言葉によって語られている。政治的学問的エリートを育成するための教育に最もふさわしいものであった。

ではフランスの文化は何人のために存するのか。フランスの教育は誰人のために行われるものなのか。過去の教育はフランス国民のある限られた人々のために設けられ、行われていたのではなかったか。古典学科と競争試験との連続した教育は「真に肉体を育て精神を培う」ものから遠いものである。かかる教育によって教育される生徒は在学中に既に将来の職業とは全く無関係な知識の中に閉ぢ籠められ、実際の生活から浮き上り、学校も生徒も「民衆から去ること遠い」ものとなってゆく。文化も教育も国家のもの、国民のものであるべきであるならば、またそうすることによってはじめてフランスが復興し得るのであるならば、教育の全体的な改革が行われなければならない。

世界大戦は国民生活の改造の必要を示唆し、国民はそれによって現在の生活を変えつつある。しかし国民は将来の生活に關与する現在の教育の改造については何ら触れようとしてはない。

49 「世界大戦——それは大なる教訓以外の何ものでもなく、また国民に対してその所有するすべての物質的手段、すべての精神的資源を集中することを強制したものであり、また人々に共同生活をなすこと、各人の資源を共同にすること、共同社会のために身を捨てることを教えたものであるが——この世界大戦によって人間の高尚なる精神はその属する階級や、職業や、友人がお互に利益を得ることを希望するに到ったのである。しかるに教育だけがこの傾向——国民をより高き運命にまで引き上げ且つ悲劇的擾乱の幕を透して、未来の崇高な姿をわれわれに見せてくれるところの——から離れているべきであろうか。人々はすべてを変えようと希望している。諸君は過去と絶縁せずして、大戦による動揺の中に置かれたすべての活々とした勢力を利用し、現在のままの形式で精神的統一を与うる教育改革なるものが行われ得ると思われるか。」

教育を共同にし、統一し、共通のものとするためには、教師の間にあつた障を取り除かなければならない。戦前には教師は夫々の困いの中にうづくまっていた。しかし戦場においてはその心理的な困いは破られた。社会生活においては今や困いのない生活をもつことができるようになった時、教師は再びその困いを建て直そうとするのであろうか。社会生活が一筋の路を辿ろうとする時に、教育界だけが繋ぎ合せた古糸の幾筋かをもつことは果して正しいことなのであろうか。もしこの状態を続けていたならば教育も教師も国民に対して存在理由をもたないものにならう。教育が国家の再建の礎となり、教師が国民の生活の先頭に立つためには、教師の団結がなされなければならない。しかし、一部の教師が如何に高い理想を掲げていても、その理想に背反する古い觀念の所有者がいたのでは、その実現は不可能である。すべての教師が人間教育の唯一の理想に一致して、「一つの力であるところの団結をなさぬ限り、国民の中の何ものでもあり得ない。諸君のなすべきことは唯一つだけだ。即ち諸君の職業に組織された力を与うることに、生きた団体を作ることこれである。中世において寺院を建てた石工さえ、組合を持っていたではないか。」教師の組合はあくまでも教育の中から経済的、社会的な理由にもとづいた差別を徹廃するための教師の共同体である。理想実現の母胎たるべきコムパニヨンの人たちは戦時中四十五名に達していたが、「志を同じくする青年の三分の二は戦死した。」「一九五〇年代のフランスを作る」任務を担う者の数は極めて少い。少いが故に団結こそ必要なのである。

知識階級とは真理を生活の中に求めず、書物の中に求めようとし、批判に終始して実践をなさないのであり、無力と見做されていた。しかし「若き哲学者は率先して戦い、賞讃すべき兵士となった。しかも彼らは隊の長となって働いた。」知識階級も「死ぬことを辞せないことを塹壕内の友——農夫たると、労働者たるとを問わずに——示した。」生徒或は教師として出陣した知識階級は大きな試練を経験することによって思索と実践とを結合し、意志する人間となって帰還した。過去の知識人が観想的であり感傷的であったのに対して、新しい知識階級は国民と共に行動する人間である。

如何なる思索も実践から離れては思想的內容をもつことはできないし、実践も思想的背景なくしては正しくありえ

ない。生活は思想によって向上し、思想は生活の上に展開する。だが過去のフランスにはこの二つの結びつきがなかったのである。

「この思想と生活との結合に関してドイツはわれわれによい例を示してくれる。ドイツの強さの秘密をよく研究すれば、その原因はドイツ人の思索と実践の合成にある。ドイツも十八世紀までは感傷主義的、哲学的ドイツであつて、功利的、現実的ドイツではなかつたことをわれわれは知っている。ドイツ浪漫主義は科学と実践との結合を説いた。」そしてその思想は「国民的統一行動を惹き起し、ドイツ全土に大なる鼓舞を与え」た。またそれは大戦中に教育にも反映し、「学校制度の上に残る弱点を勇敢に取去ろうとして統一学校案を立て、すべての者に対して初等教育の無償義務制を実施し、更に職業教育をよりよく発達させようとしている。あらゆる方面に思想と生活との結合に対する努力が見られる。」

またアメリカでは、ウィリアム・ジェームズやウッドロー・ウィルソンが理想と現実との要求、個人と社会との要求を満足させようとしている。

思想と実践と、理想と現実との統一は新しい社会の要請であり、また国力は伝統の上に眠る知識階級によって産み出されるのではなく、「すべての職業的団結より生み出」されるのである。それ故に行動力をもつに到つたフランスの知識階級は一つの理想の下に手を繋ぐべきなのである。

フランスの文化を理解するには、それに耽溺することによって可能であり、それを外に対照的に見ては理解し得ないものと考えられた。またフランス人はその文化の内側からのみ見て、外側へ出て見ることをしなかつた。彼らは自らを彼ら自身の定めた価値基準をもって測り、外の世界の変化発展を見ようとはしなかつた。自国の文化に対するかかる溺愛は却つて文化の停滞を招いていたのである。不幸なことではあるが戦争とは諸国家の精神文化と物質文明のパロメーターである。また国民の精神的結合の強弱を測る尺度でもある。この場面に遭遇した人たちは、自己と自国

とを更めて客観的に凝視せざるを得なかつたのである。伝統とは古きものが単に温存されきたつたものなのか、それとも新しいものと調和しながら発展するものなのか。切迫した現実のなかで新しい体験をもつた彼らは文化や伝統に対する回想や追憶に留まらうとはせず、反省をし自覚をもつに至つたのである。彼らは祖国を否定する力に直面した時、その力に抵抗した時にはじめてフランスを識つたのであるといえよう。そしてフランスの最も強く美しいところを弁えると同時に、フランスの最も弱く醜い箇所をも知られたのである。それ故に彼らはそれを摘出し、人々の前にさらけ出し、その矯正の必要を訴えたのである。

三

統一学校とは教育の劃一主義を意味するのではない。また国家権力による教育の集中主義や統制でもない。中等教育における高等小学校、リセ、コレージュが生徒の能力によらず、財産と階級によつて入学者を決定する弊を取り除くこと、将来の職業と生徒の能力との結合から学校を選択しうる余地をもたせながら、中等教育までを無償とすることであり、更に才能ある者には国家の経済的援助によつて高等教育への機会を与えておくことである。また公私の学校の夫々の性格に基づいた知的教育と、各地方の特殊事情を生かしながら地方産業と結びつきのうちに職業教育が行われることを企図するものである。

すべての人に対して行われる教育は、また同時に人間のすべての機能に対して行われるものでなければならない。フランスの教育は中世的僧院教育の形態と貴族趣味とが混合した誤つた古典主義を原型としているところから、肉体的訓練、生産技術の育成を無視して、只管知的教養を高めることに専念してきた。知識は重んぜられなければならないが、人間を単なる知的機械とすることに終つてはならない。国家の発展、社会の繁栄は肉体的健康と知的教養との調和ある統合の上にはじめて可能なのである。それ故教師は知的耽美主義者であるよりも、ギリシヤ的な調和を索める者であるべきである。真の古典的理想、すなわち「身体の発達、意志の鍛練、知識の獲得、この三つの目標」をフ

ランスの教育は理想とすべきである。しかしギリシヤ的理想の復活とは、ギリシヤ時代の古い型をそのままに甦らせることを意味するものではない。現代において知育と徳育と体育とが、どのような均合いを保べきかは考究されなければならぬ。だがこれまでの古典的教養がギリシヤ文字の読解力だけで評価されていたということは、単なる模倣を教育と見誤っていたことにもとづいている。正しくギリシヤ的であるためには肉体的能力と職業的技術との発達を目標とする体育が加えられていなければならない。身体的発達のためにあらゆる競技も採り入れ、総合的な体育を実施しなければならぬ。競技を採用するのは、「意志を強固にし、規律を重んじ」させるためである。体育を一つの科目とすることによって、「学校はエネルギーと秩序の学校となり、各生徒は自分の強さを感じずるだけでなく、更に団体としての力を感じずるであろう。」またスポーツはあらゆる社会層の接触を可能ならしめるから、そこに新しい秩序も生れてくるであろう。

生徒の身体的な活動を高めることによって、学習に対する意志を強めるとともに、学習への意欲を引き出すこと、昂めることが可能である。

従来は両親の思惑によって子どもは学習を強制され、コンクールに駆り立てられて、暗い道を走らされてきたが、子ども自身の意欲と力とによって進められるようになるであろう。

統一学校がすべての人に対して行われる教育施設であるためには、教育の機会均等を妨げている社会的経済的な原因を排除しなければならない。また能力をもてる者に、より高い教育の機会が与えられるための政策が立てられなければならない。そのために教育の無月謝制度と給費制度が設けられることが必要となる。国家は国家自身の発展のために国費による教育の経営を図るべきである。国家がもし教育費を惜しむならば、国家は己れの中に敵を養うことに均しい。国家の手によって教育が運営されるということは、教育に対する独裁を許すということではない。「現代の国家は二つの役目をもち、二つの外貌を備えている。支配者としては義務を課し、制裁を加える。けれども創造したり、働きかけたりすることはしない。もしそういうことをするならば、それは国家ではなく、一個人にすぎない。」国

民のすべてに教育の門戸を開放し、教育を享受し得るようにするために、法的措置を構じ、国民が望む教育を受け得る体制を設けておくことは国家の責任である。就学させること就学することが国民の義務であるといいうるのは国家のこの責任が果された時においてである。

コムパニヨンの統一学校の主張は、二つの学校系統の共通制を実現すること、教育の機会均等、無月謝制度と給費制度、実業教育の振興等であり、その実現のためにすべての教師が団結すべきであるというのである。

コムパニヨンは更に多くの同志を獲得し、一九二四年エドアード・エリオ (Edouard Herriot) 内閣の下で文相フランソワ・アルベル (François Albert) により統一学校委員会 (Commission pour l'École Unique) として公的な組織として認められ、教育制度改革のための活動を開始した。一九一八年から一九二五年頃にかけて統一学校制度の対策は政党の教育政策にも採り上げられ、また民間の団体、個人によって研究もされ、賛否の見解も数多く発表された。

コムパニヨンの主張する統一学校は、大戦後の教育界の理想形態となり、その実現も不可能ではないかのように思われた。

しかしこの主張は、古きものは古きが故に尊重されなければならない、古きものの中にフランスは存するという伝統主義者の抵抗に、また戦後の疲弊した経済的理由に基づく障害に衝き当らなければならなかった。またジェズイットの学校以来長い歴史と広い組織とをもつ私立学校側からの反対は一層激しいものであった。無月謝制度を実施することに對する私立学校の反対は、無月謝である官公立中学校に生徒が集中し、月謝を徴収する私立中学校には入学者が少くなり、そのために経営が困難となるという点にある。宗教教育を重んずる私立学校が衰えることは、国民的信仰であるカトリックの盛衰にも連らなるが故に、宗教家からも反対された。また中等教育の門戸を広く開放することによって、ホワイト・カラーの失業者を激増させることを危惧した右翼政党からの反対もあった。

教育内容に実務的教科を加えることには、そのことよって国民の一般的教養が低下するであろうこと、伝統的な文化の教授が不十分になることを危惧した古典主義者からの反対に出会った。また中等教育を一般化することよって、指導者階級の養成が弱められ、そのために国力全体が弱体化するのではないかと懼れられた。

統一学校はさまざまな反対に会いながらも、その理想を着々と実現してゆくのである。無月謝制度はポアンカレ（Poincaré）内閣のエリオ文相の手によつてその緒が開かれた（一九二六年）。逐年、学年毎に実施して一九三三年には完全に中等教育の無月謝制度が実現した。また複線型の中等教育制度もその頃のフラン貨暴落による経済危機が原因となつて、地方教育費節約のため、リセ、コレージュと高等小学校、実業学校とが併合せざるを得なくなったので、二つの系統は一本とならざるを得なかった。

給費制度については徹底した対策が構じられていた。無月謝制度によつて恩恵を被るのは通学生であつて、寄宿生は寄宿するために余計の出費に迫られる。それ故その経費も補助されなければならぬし、また子どもを学校に送り出したために家計に支障を来たす家庭には援助が施されるべきであると考えられたのである。

公教育における宗教教育は停止され、私立学校においても制限され、また古典科教育に対する現代的教科は増える等、第二次世界大戦に至るまでのフランスの教育は、略々統一学校としてのある程度の形を整えることが出来た。

しかしこのような努力も第二次世界大戦で敗北し、ヴィシー政府成るや、再び旧状への復帰が図られることになつた。ドイツはフランス国民を分裂させる意図をもつて、宗教教育の制限を徹底し、国費による補助を与えて宗教団体の勢力を増大せしめようとした。宗教教育の問題は統一学校における諸問題の一つでしかないのであるが、しかしフランスにおける宗教の問題は、あらゆる問題の鍵である。宗教教育が無制限に許され、私立学校が過去の形において復活したならば、フランスの教育は昔の姿に戻ろうとするであらうし、またその前に甚だしい混乱に陥つたに違いない。しかしその混乱はナチス軍の退却によつて避けることができた。そしてフランスの政治は第四共和政府の下に統一されたのであるが、教育は必ずしも統一へと向つていない。フランス革命以来の教育の中央集権は弱体化し、教

会の勢力は伸張しつつあり、再び多くの問題を内蔵するに至っている。そして問題の解決を一層困難としているものに、反教会的な民主勢力の団結がある。

統一学校の謳う教育理念は、フランスの三つの理想から生れたものであるが、その形式面が一応整った今日、その精神をどのように生かしてゆくか、それとも全く新しい精神を培うとするのか、前大戦の直後にコムパニヨンに課せられた問題とは違った問題が新に課せられているようである。

参 考 文 献

- R. F. Butts A Cultural History of Western Education
 N. Hans Comparative Education
 Moehlman & Roucek Comparative Education
 D. W. Miles Recent Reforms in French Secondary Education
 A. Meyer The Development of Education in the 20th Century
 海後勝雄・広岡亮蔵編 近代教育史 III (フランス帝国主義下における教育の基本的諸問題——佐藤英一郎)
 文部省教育調査部 教育制度の調査 第五・六・七・八輯 (本文中の引用は「教育制度の調査」による)
 雑誌 世界の教師 第二号

Résumé

École Unique

By

Eizaburô Nagura

The education in France had such characteristics as mediaeval classicism, Cartesian rationalism and a centralized authoritarian system. Through the Republics and the Empires, there were no changes.

With the outbreak of the First World War, a group of intelligentsia, called *Compagnons*, who fought in the terrible warfare in a deadly monotony and in the trench, improved the dual educational system and its classical tradition, and insisted on establishing *École Unique* which should be adapted to new society. They considered it necessary, for the sake of the future reconstruction of France, to adopt a system by which all the children in France could equally have same education. For this purpose, they had to have systematic compulsory education, especially, secondary education for all. In order to develop France in modern world, they had to adopt a modern curriculum, to separate religious education from public one, and to give scientific modern education. Such an ideal had already been realized in U.S.A. and Germany, but not in France inspite of many efforts since the Revolution.

After the First World War, the claim was recognized by the people and was taken up by the Socialist Party as an educational policy and thus finally realized. During the Second World War, however, Vichy France abolished it. It seemed to go back to the old traditional education and conservative administration again, but the Fourth Republic restored the system necessary for modern society.

Today, the education in France, with the two opposing forces of the classical education and the request of modern society, is obliged to find its new ideal.